

『就実教育実践研究』第10巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2017年3月31日 発行

教育心理学科とその入学生の特徴

— 入学時の調査結果を中心にして —

**Characteristic of educational psychology department and belonging students:
mainly, based on results of the investigation in entrance.**

堤 幸 一

教育心理学科とその入学生の特徴

—入学時の調査結果を中心に—

堤 幸一 (教育心理学科)

Characteristic of educational psychology department and belonging students:
mainly, based on results of the investigation in entrance.

Koichi TSUTSUMI (Department of Educational Psychology)

抄録

本学教育心理学科は、認定心理士申請資格取得を満たすカリキュラムを学科の基幹として心理学を学ぶだけでなく、それらを現場で活用できる有用な専門性を持った養護教諭や特別支援学校教諭または関連援助職(支えケアできる人材)の養成を目指して開設された。

本研究では、開設6年目を機に、本学科の特徴と関連づけて、入学時の課題調査の結果を通して見られた本学科入学生の目的や自己効力感における特徴を分析し、現状と今後の課題を考察した。

キーワード

進路希望、自己効力感、動機づけ

I 背景と目的

1. 学習ポートフォリオに関して

本学では、「合格者へ」の小冊子で、入学前に実践推奨する課題および推薦図書リストを送付して、入学前の自習を促している。本学科ではこれらに加えてさらに、入学当初の新入生に対し、希望進路・自己効力感の調査を実施している。

これらの調査は、文部科学省中央教育審議会(2008)が提唱した「学士力」の養成の一助とするべく構築途上の、本学科独自の学習ポートフォリオの一部である。学士力の構成要素のうち、特に技能(コミュニケーション能力・情報リテラシー・論理的思考力)および態度(自己管理能力・生涯学習力)、それらを統合して活用する創造的思考力を本学科では重視していて、ここで述べる調査を始めとして、より体系的、組織的に、カリキュラム内外、大学内外での学びを蓄積、自他評価を継続していくことで、それらを効果的に養成・向上させることを支援する仕組みがこのポートフォリオである。残念ながら学習ポートフォリオとしてはいまだ未完成であるが、入学生の特徴を知り、より効果的な指導に役立てることは既に可能である。

2. 本学教育心理学科の特徴

本学科は、認定心理士申請資格取得を満たすカリキュラムを学科の基幹として心理学を学ぶだけでなく、それらを現場で活用できる有用な専門性を持った養護教諭や特別支援学校教諭あるいは関連援助職の養成を目指して開設された。

教育は「教え導く」側面と「支えケアする」側面とを有しているが、本学科が養成する養護教諭（保健室の先生）や特別支援学校教諭は、学校現場の現代的な課題（不登校や保健室登校、いじめといった問題）の下での児童生徒への援助、特別な支援を必要とする児童生徒への対応といった、「支えケアする」役割を担う教員であるといえる。

すなわち本学科の大きな特徴のひとつは、心理学を活かした一般職あるいはより専門的に学び臨床心理士を取得するために大学院進学を目指すことも選択できるし、心理学の知識・スキルを児童生徒の支援・指導に活かせる教員を目指すことも可能なことである。

3. 目的

本研究は、開設6年目を機に、本学科の特徴と関連づけて、入学時の課題調査の結果を通して見られた本学科入学生の希望進路や自己効力感における特徴を分析し、現状と今後の課題を考察することを目的とした。

II 方法

1. 調査対象

本学科2014年度から2016年度入学生、合計220人である。

2. 調査時期と手段

実施時期は、4月初旬のオリエンテーション期間から5月初旬までの間である。実施形態は学習ポートフォリオの一部として実施した。実施手段は、本学e-ラーニングシステムWebclass上に設置したアンケート課題として、それぞれの課題で締め切りを設定して各自提出してもらった。

3. 調査内容

1) SWOT課題

最初の課題は、表1に示したSWOT分析の課題である。入学直後の希望進路に応じた自己分析を促すために設定された。三省堂（2006）の大辞林第三版によれば、SWOTとは、Strengths（強み）、Weaknesses（弱み）、Opportunities（機会）、Threats（脅威）の頭文字語をとって作られたアクロニムであり、一般には企業などの事業分析法として用いられることが多い、とされる。

この課題には、将来目指す教職や進路を明確化して、現状の自己分析を通じて、動機づ

けを高める狙いがあった。

表1 SWOT分析の質問事項

-
- 1：あなたの将来の目標（具体的職業名あるいは職業内容）は何でしょうか。
 - 2：その目標達成に役立つ、あなたの長所・強みはなんですか（S：強み）。
 - 3：その目標達成の妨げとなるだろう、あなたの短所・弱点は何でしょうか（W：弱み）。
 - 4：その目標達成に、明るい見通しを与える外部状況は何でしょうか（O：機会）。
 - 5：その目標達成の障害となるような外部状況はなんですか（T：脅威）。
 - 6：SWOT分析を通じて、今後あなたは何をしようと思われましたか。
-

2) 入学前課題の実施状況

SWOT課題と同時に課題提出してもらった。

実践課題は、後掲の表3に示すように11項目あり、どれも入学後の専門教育への意識、態度、動機づけの向上に資するものと位置づけられている。調査項目には、実施の有無および実施による気づきについての自由記述欄があり、さらにどの推薦図書を読んだのかについての項目も含んでいた。

3) SMSGSE尺度の測定

1)、2)の課題が完了して、Webclassの操作にある程度習熟した後に、課題として提出してもらった。SMSGSEは、三好(2003)が尺度化したもので、人間の主観的な感覚、例えば、たいていのはできるような気がするという感覚そのものを直接的に測定する「主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度（Scale Measuring a Sense of Generalized Self-Efficacy）」のことである。質問項目は表2に示したもので、それぞれ5件法で回答を求めた。

表2 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度
(SMSGSE) 質問項目

-
- 1：どんな状況に直面しても、私ならうまくそれに対処することが出来るような感じがする。
 - 2：私にとって、最終的には出来ないことが多いと思う
 - 3：私が頑張りさえすれば、どんな困難なことでもある程度のことはできるような気がする。
 - 4：熱心に取り組めば、私にはできないことはないように思う。
 - 5：やりたいと思っても、私にはできないことばかりだと感じる。
 - 6：非常に困難な状況の中でも、私ならそこから抜け出すことができると思う。
-

Ⅲ 結果

1. SWOT課題より得られた希望進路の分析

本来この課題は、将来目指す教職や進路を明確化して、現状の自己分析を通じて、動機づけを高めるための課題であるが、本稿では自己分析内容については触れず、1番目の質問事項「将来の目標(職業内容)」のみを資料として抽出し、検討を行うこととした。また、未受検などの欠損データを除外したため、ここでの有効データ数は196となった。

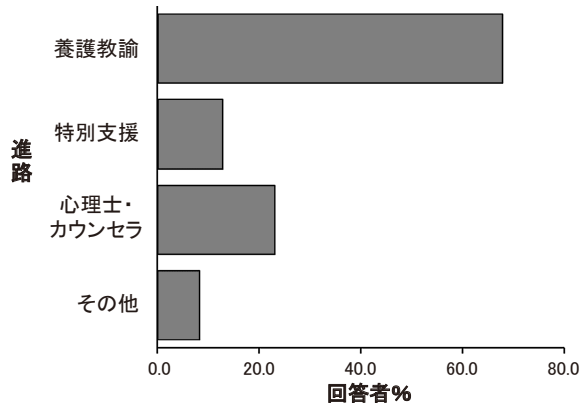


図1 進路別希望者割合

進路希望割合は、まず複数回答を許容して、のべ人数で集計した。人数比は養護教諭：特別支援：心理系（心理士・カウンセラ）：その他＝133：23：45：16となり、その比率を図1に示した。こののべ人数比でカイ二乗検定を行ったところ、進路によって希望率には1%水準で有意差があり ($\chi^2(3) = 157.16, p < .01$)、さらにライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、養護教諭 > 心理系 > 特別支援 = その他 ($p < .05$) の順に、有意に希望率が高いことがわかった。

表3 実践推奨している入学前課題および実施率

番号	課題内容	度数	実施率(%)	養護希望
Q1	学科を選んだ動機と自分の生きてきた歩みのつながりを書き留めましょう。	158	84.9	112
Q2	大学入学にあたっての心境を、あなたが最も信頼する人に向けて、手紙をしたためよう。	105	56.5	78
Q3	高等学校の学習、特に数学を復習しておきましょう。	96	51.6	66
Q4	レポート・論文の書き方の本を読み、分かりやすいレポートを作成するための基本的な知識を得てください。	93	50.0	61
Q5	家事を何かしてみよう。	182	97.8	122
Q6	NHK教育TV「中学生日記」保健室シリーズなどを視聴しておきましょう。	16	8.6	13
Q7	卒業する(した)高等学校の保健室を訪問して1日養護教諭体験をしてみてください。	49	26.3	43
Q8	医療・健康に関する新聞記事を集めたり、それ以外のニュースにも毎日触れましょう。	124	66.7	91
Q9	小学校・中学校の頃の、障がいのある友だちのことを思い出しましょう。	165	88.7	110
Q10	特別支援学校、障害児者施設などの教育・福祉ボランティア活動に積極的に参加しておきましょう。	36	19.4	23
Q11	身の回りにある障害のある人を助ける工夫をみつけましょう。	126	67.7	88
平均度数 / 平均実施率		104.5	56.21	73.4

続いて、複数回答のうち、先に回答されている進路を優先と考えて、再集計すると、人数比は養護教諭：特別支援：心理系：その他＝133：24：23：16となるが、これに対して同様にカイ二乗検定を行ったところ、やはり進路希望率には1%水準で有意差があることがわかり ($\chi^2(3) = 192.78, p < .01$)、さらにライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、養護希望 > 心理系 = 特別支援 = その他となり、養護希望のみが他に比べて、有意に希望率が高いことがわかった ($p < .05$)。

2. 入学前課題の実施状況

以下の分析は、結果Ⅲ-1で得られた希望進路間で各変数平均を比較するために、対応する調査のどれかが未回答など欠損のあるデータはケースワイズで除外した。したがって

人数比は養護教諭：特別支援：心理士：その他＝126：23：22：15、全データ数は186となった。

1) まず全員の回答に関して、入学前課題の実施度数および実施率を、課題内容とともに表3に示した。

表から読み取れる傾向として、各課題の平均実施率が56.2%であることから、中程度の意欲が見られたといえる。具体的な課題内容と対応させてみると、Q1「学科選択動機の振り返り」、Q5「家事の実践」、Q9「障がいのある友人との思い出」の実施率がどれも80%を越えた一方、Q7、Q10の実際の「ボランティア参加」は26.3%、19.4%と全体では低率であった。これについて希望進路からより詳しく検

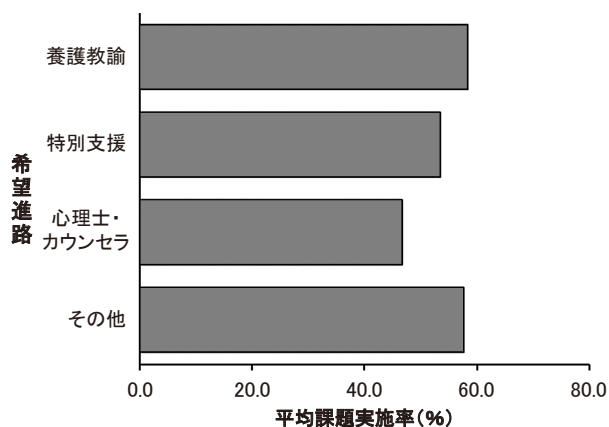


図2 希望進路と課題実施率

表4 推薦図書読破率

番号	書名	度数	%
1	こころの旅(神谷美恵子)	42	22.6
2	発達障害かもしれない(磯部潮)	51	27.4
3	トリセツ・カラダ(海堂尊)	52	28.0
4	発達障害の子どもたち(杉山登志郎)	30	16.1
5	思考の整理学(外山滋比古)	62	33.3
6	子どもとことば(岡本夏木)	52	28.0
7	さらば、悲しみの性(河野美代子)	58	31.2
8	サブリミナル・マインド(下條信輔)	44	23.7
9	人はいかに学ぶか(稲垣佳世子・波多野諠余夫)	25	13.4
10	新編 教えるということ(大村はま)	45	24.2
11	教えることの復権(大村はま)	33	17.7
12	1リットルの涙(木藤亜也)	144	77.4
	読まなかった	3	1.6
	のべ読破冊数 / 平均読破%	638	28.6

討すると、Q 7、Q10実施者のうち、養護教諭希望群がそれぞれ43/49 (87.8%)、23/36 (63.9%) と多くの割合を占めており、Q 7「1日養護教諭体験」だけでなく、Q10福祉ボランティアをも実践する高い意欲が見られたことが分かった。

さらに希望進路群別に平均課題実施率を図2に示した。分散分析を行って検討したところ、5%水準で、群間に有意差が見られることがわかった($F(3,182) = 3.52, p < .05$)。そこで、Holm法による多重比較を実施した結果、心理士希望群が養護教諭希望群と比較して有意に課題実施率が低かったことがわかった($58.2 > 46.7, t(182) = -3.11, p < .05$)。希望群の他の組合せ間にはどれも有意差はみられなかった。

2) 次に、全員についての推薦図書の読破率を表4に示した。この場合、度数はその書名を読破した人数であり、%は186人を100とした率である。したがって好まれた度合いといえる。全体の平均は28.6%であり、どの本もおよそ4人に一人は読破したことになる。具体的にみると、12番「1リットルの涙」が77.4%でもっとも好まれており、9「人はいかに学ぶか」は13.4%でもっとも読まれなかった。

個人の平均読破数は3.02冊であり、希望進路群別に分散分析によって平均読破数を比較したが、どの進路希望群においても、約3冊の読破数で、有意な違いはみられなかった($F(3,182) = 0.356, n.s.$)。

3. 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度 (SMSGSE) の分析

SMSGSEは6項目の合計点数を(逆転項目を処理した上)求めて尺度得点とする(以下GSE得点と略す)。なお三好(2003)によれば、この尺度は1因子構造であり、解釈も単純なため、非常に使いやすい尺度である。

全体のGSE得点の分布を求めて、図3に示した。全体の平均得点は 19.73 ± 4.26 であった。この値は、堤(2012)の報告した値 19.8 ± 4.04 とも、三好(2003)の調査データの平均値とも一致している。なお得られた

度数分布は、左右対称の整った釣り鐘型分布となり、ジャック・ベラ検定によると正規分布とみなせた($\chi^2(2) = 0.189, n.s.$)。

次に、希望進路群別に比較するために分散分析を行ったが、各群の平均GSE得点間に有意差は見られなかった($F(3,182) = 0.523, n.s.$; 養護、特別支援、心理系、その他の平均はそれぞれ19.9、19.1、19.0、20.3であった)。

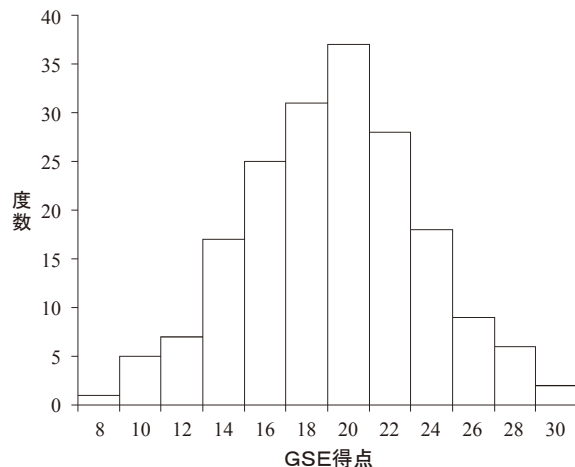


図3 自己効力感尺度得点の分布

4. 課題実施率、図書読破率および自己効力感尺度得点間の関係

3者間の関係をさらに検討するために、因子分析を実施した。

まず実施率、読破率、GSE得点をすべて百分率に変換して分析を行うこととした。表5に3変数の基礎統計量を示した。

次に因子分析にはHAD^註を用い、仮因子数を2とした上で分析し妥当であると判断されたため、最小自乗法にて初期解を推定、さらにプロマックス回転後に表6の因子負荷量行列を得た。以下、因子の解釈と命名を試みる。

因子1は、課題実施率と図書読破率とに高い正の因子負荷があることから、「課題遂行動機の強さ」と命名できるだろう。また単純なGSE得点とはほとんど因子負荷がみられなかった。

次に因子2は、GSE得点に正の因子負荷がみられたことから、「自己効力感の高さ」と命名できるだろう。しかし図書読破率には負の因子負荷が見られたことから、自己効力感が高いほど、図書読破率が低いことがわかる。これは自己効力感が高いことが、すべての行動の動機づけを高めたり、活動性を増加させるといった単純な関係ではないことを示している。このデータからでは詳細な仕組みは不明であるが、例えば、少数の図書でも読んでおけば十分に要求を果たしたことになる、あるいは自分ならば少数の読書でも役に立てられると感じたためである、といった説明が可能だろう。

なお2因子間の相関を求めたが、 $r=.131$ と極めて弱い相関しか見られなかった。

表5 変数名と基礎統計量

変数名	N	平均値	SD
課題実施率	186	56.21	16.32
図書読破率	186	25.04	17.55
GSE得点	186	65.75	14.15

表6 因子負荷量行列

変数	因子1	因子2	共通性
課題実施率	0.82	0.16	0.74
図書読破率	0.43	-0.36	0.28
GSE得点	0.03	0.41	0.17
因子寄与	0.87	0.34	
因子寄与率	0.29	0.11	

IV 考察

1. 本学科および入学生の特徴の関係

本学科の特徴は、心理学の専門教育を行うことと並行して、それら心理学の知識やスキルを活用できる「支えケアする」役割を担う養護教諭や特別支援学校教諭の教員養成も行うという点である。以下、この特徴と入学生の傾向との関係について考察していく。

1) 希望進路について：結果Ⅲ-1から、進路として養護教諭希望群が68%と最も多く、また彼らの17%は心理系への希望を併有していることが明らかになった。そして併有希望を含めた心理系希望群は23%、特別支援希望群は10%であった。

2) 入学前課題の実施率：結果Ⅲ-2-1)から、課題実施率には希望進路群間に有意な群差があり、これは心理系希望群の実施率が養護教諭希望群の実施率よりも有意に低

かったことによることが明らかになった。他の希望群間の組合せにはどれも有意差がみられなかった。

また実際の「ボランティア参加」は全体では低率であったが、それらの課題実施率をより詳しく検討すると、養護教諭希望群が6～8割と多くの割合を占めており、ボランティアを実践する高い意欲が見られたことが分かった。

3) 推薦図書を読破率：結果Ⅲ-2-2) から、読破率には希望進路群間に有意差が見られず、各群とも平均3冊程度の読破率であったことが分かった。

4) GSE得点：結果Ⅲ-3から、GSE得点は正規分布しており、全体の平均は 19.73 ± 4.26 であり、これは他の大学新生生のデータとほぼ同等であることがわかった。また希望進路群の平均得点間には有意差が見られなかった。

これらをまとめると、

①本学科入学生は、学科の特徴である心理学を核にして「支えケアする」役割を担う教員・教育支援者の養成というコンセプトを的確に捉えて志願し、入学してきている（特に養護教諭希望群に多い）こと、

②養護教諭希望群には、ボランティア課題実施に熱心で動機づけが高い者が多いこと、

③本来、より意欲的であることを期待される心理系希望群の入学前課題実施率が、実際には、養護教諭希望群の実施率より有意に低かったことから、課題内容の精選や分野分けの明確化を行うなど、課題実施への動機づけがより一層必要であること、

④本学科入学生は、自己効力感の尺度であるGSE得点においてはごく平均的であり、希望進路群間にも有意差がなかったため、大学での学びに対しての基本的な特性にも、入学時点においては優劣はないこと、

以上のことが明らかになった。

2. 今後の課題

1) 心理系希望群への対策

入学前課題の実施率が、養護教諭希望群と比較して、有意に低かったことは、基幹科目である心理学を学ぶことの魅力と関連があるとすると、重要な問題であると思われる。

入学前課題の意義や興味深さを、丁寧に伝えるように改善するとともに、課題内容を精選したり、希望進路ごとの適用課題を明確化したりすることで彼らの動機づけを底上げすることが必要である。

また今後、入学者全体へ、直接的な動機づけの測定を試みるなど、この知見が統計的に確かな傾向なのかの検証をすることも必要であろう。

2) GSE得点：

自己効力感の高さは、大学生活における失敗やつまずきへの対処において重要な役割を持つと思われる。例えば、同じ失敗をしても、自己効力感が高いと、やり直しへの意欲も高く、素早い立ち直りが期待されるが、一方自己効力感が低いと、失敗の痛手を引きずり、

やり直しが困難になり、逃避傾向にもつながりやすい。

本研究で用いたGSE得点は、主観的感觉としての人格特性的自己効力感であり、頻繁に変化するものとは思われないが、現実場面での行動とその成果、認知によって発達的に変化することもありえる。

そのため、入学時点では平均的な大学新入生の水準であったものが、一定の経験を積んで学びを深めた後にどう変化するのか、あるいはしないのかを、継時的に調査することも必要であろう。調査時期としては、例えば、2年生の学年末や卒業直前が適切であると思われる。

引用・参考文献

- 1) 三好昭子(2003). 主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度(SMSGSE)の開発, 発達心理学研究, 14, 172-179.
- 2) 文部科学省中央教育審議会 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (答申), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm.
- 3) 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 4) 堤 幸一 (2011). 教育心理学科における学士力養成と支援の仕組み, 就実大学・就実短期大学附属図書館報「共翔」, 19, 14-15.
- 5) 堤 幸一 (2012). 「教育心理学科の特徴を活かした学士力養成の試み—ポートフォリオの活用を中心に—」, 就実教育実践研究, 5, 175-184.

¹ 註: HADとは、清水 (2016) が、EXCEL VBAで作成した主に心理統計分析を行うためのフリーソフトウェアである。